法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-06

能界展望(平成二十年)

中司, 由起子

(出版者 / Publisher)
法政大学能楽研究所 / The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
能楽研究 / 能楽研究
(巻 / Volume)
34
(開始ページ / Start Page)
121
(終了ページ / End Page)
130
(発行年 / Year)
2010-03-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00007343

Hosei University Repository

能界展望（平成二十年）

中司由起子

はじめに

平成二十年は、将来現代能楽史を振り返ったときには一つの節目の年になっているのではないだろうか。

本年には、いくつかの能楽堂や演能団体が開場・設立の区切りとなる記念の年を迎え、年末には、戦前から活躍され能界の重鎮であった笛方一噌流の藤田大五郎氏が逝去された。先人の思い出や功績はもちろんのこと、能楽堂や団体のこれまでの歴史や成果を記録保存して未来へと伝えていくことが求められている。

それと同時に、能楽の今後を真剣に考えなければならない時期にもきている。11月にはユネスコ（国連教育科学文化機関）の無形文化遺産条約（平成18年発効）に関する会議が開かれた。その会議において、能楽は、歌舞伎・人形浄瑠璃文楽や世界の伝統芸能・民族儀礼など九十件と共に、「ユネスコ無形文化遺産」として登録された。社会一般では、平成15年に能楽がユネスコの「人類の口承及び無形遺産に関する傑作の宣言」を受けた際ほど話題にならなかったようであるが、今回の登録により能楽は世界を代表する無形文化遺産として認められただけでなく、日本政府には能楽を保護する義務も生じたということになる。

現代の能界に後継者や観客、稽古人口といった多くの課題があることを否定する人はいないだろう。それらは、変化が早くさまざまな面で多様化した現代社会においては、なかなか根本的な解決策を出しにくい問題でもある。しかし能楽に関わる者が、摩擦や痛みを伴いつつも、これらの問題に向き合い、現代に生きる古典芸能としてのあり方を模索し続けるのか。または先に触れたユネスコの条約のような動きに頼りきって、伝統という言葉のみを掲げ、能楽をまったく保護されるべき芸能にしてしまうのか。能楽のありさまが変化していくターニングポイントを迎えていると考えられるのである。

なお本稿ではすべての催しをとり上げることはできず、また敬称は一部省略させていただいたことをはじめにお断りしておく。

Hosei University Repository

さまざまな催し

【記念能】

前述したように本年は五周年、十周年など節目を迎える能楽堂や団体がいくつもあり、それを祝う記念の能の会が数多く催された。以下に、主な記念会を開催順に列挙するが、とくに国立能楽堂開場二十五周年、京都観世会館五十周年、観世九皐会百周年といった十年以上の節目を迎える能楽堂や団体が多いのも本年の特徴である。これらのような長い歴史を持つところでは、設立の経緯や実状などを記録として残し、それを後世に伝えていくことが必要であろう。単に祝賀記念能を催して終わるのではなく、これまでの流れを省みて問題点や課題をふまえ、次回の記念の年へとつながる展望を見据えていくことが歴史を積み重ねることに繋がるのではないだろうか。

◎山本能楽堂八十周年記念公演

5月31日。山本能楽堂。〈翁〉山本章弘・〈二人静・立出之一声〉波多野晋・〈猩々乱・双之舞〉梅若六郎ほか。大阪の山本能楽堂は、昭和2年(一九二七)に初代山本博之によって建設され、戦災により焼失するも昭和25年に再建された。平成18年には、国の登録有形文化財として登録されている。

◎梅若研能会設立八十周年記念「橘香会」

6月7日。国立能楽堂。〈道成寺・無躅之崩〉梅若万三郎ほか。

◎金剛能楽堂会館五周年記念能

6月29日。金剛能楽堂。〈安宅　延年瀧流〉金剛永謹・〈乱〉金剛龍謹ほか。金剛能楽堂は平成15年に中京区菊水鉾町から、上京区の京都御所の西向かいの現在の地に移築された。

◎国立能楽堂開場二十五周年

記念公演は9月におこなわれ、番組は次の通りである。3日〈翁〉観世清和・〈絵馬〉観世銕之丞・〈末広かり〉野村萬・〈湯谷　三段之舞〉香川靖嗣、13日〈大原御幸〉近藤乾之助・〈蜘盗人〉井上菊次郎・〈泰山府君〉金剛永謹、15日〈高砂　翁ナシ・八段之舞〉梅若六郎・〈夷毘沙門〉大蔵吉次郎・〈舟弁慶遊女ノ舞・替ノ出〉本田光洋、19日〈川上〉野村万作・〈三輪神遊〉友枝昭世、26日〈福の神〉茂山千作・〈武悪〉三宅右近・素囃子〈獅子〉・〈唐相撲〉茂山忠三郎。記念公演と国立能楽堂の事業をめぐっては、『能楽タイムズ』9月号に対談(馬場あき子氏・織田紘二氏)、『観世』8月号に日本芸術文化振興会理事長のインタビュー、『新能楽ジャーナル』50～52号に評談が掲載されている。これらを見るに国立能楽堂の事業については、節目の周年を迎えるたびに、さまざまな立場から多様な意見が上がっていることがわかる。昨今は国の厳しい財政もあり、事業の内容と成果についてもシビアな視線が注がれている。次の三十周年の節目を迎えたとき、現在、指摘されている問題点や課題などに、なんらかの回答や変化があることを期待したい。

◎京都観世会館建設五十周年

五十周年の記念能会に先立つ6月17日に、社団法人京都観

Hosei University Repository

世会の人事の異動が発表された。会長の片山九郎右衛門氏が退任し、後任に片山清司氏が就任した。長老から若手へ世代交代をしたのであるが、10月におこなわれた記念能会でも、若手とベテランの組み合わせを意識した番組となっている。19日は〈翁　父尉延命冠者〉片山清司・〈高砂　八段之舞〉浦田保親・〈末広かり〉茂山忠三郎・〈松風〉林喜右衛門・〈望月古式〉橋本擴三郎、26日は〈清経　恋之音取〉武田邦弘・〈羽衣彩色之伝〉片山伸吾・〈酢蔓〉茂山千作・〈大原御幸〉井上裕久・〈恋重荷〉大江又三郎。『観世』10月号に、片山九郎右衛門氏が建設当時の思い出を語った記事が掲載された。

◎豊田市能楽堂会館十周年

10月25日〈口真似〉茂山七五三・〈松風　見留〉観世清和、12月6日〈文蔵〉野村万蔵・〈船弁慶　真之伝〉友枝昭世。豊田市能楽堂は、平成10年11月に豊田参合館として開館、コンサートホールなどを併設する。開館以来、体験講座や「能狂言がもっと面白くなる講座」等の企画を通して、能楽の普及活動に力を入れている。記念出版に、これまでに催された講座を筆録した『能狂言が見たくなる講座　十撰』が刊行されている。

◎りゅーとぴあ新潟市民芸術文化会館開館十周年

11月22日の秋の能楽鑑賞会で〈道成寺〉（山階彌右衛門）が上演された。新潟市芸術文化振興会の運営する会館で、能楽堂を併設している。

◎観世九皐会百周年

九皐会の歴史については、矢来能楽堂再建五十周年を迎えた平成14年に刊行の『観世九皐会の歩み』がくわしい。これに掲載される年表では、九皐会の名称は、明治41年（一九〇八）年に文献上に見えるのをもって初出とされているが、それ以前から九皐会として素謡会を催していたとの指摘もある。今回の記念特別公演で配布された『観世九皐会百周年』には、明治39年3月号の雑誌『能楽』に見える記事が初出であるとの説が示されており（「百年を超える九皐会の歩み」表章）、実際には百年以上の歴史を持つ会ということになる。本年度の記念会は、昭和43年に行われた六十周年記念を基準にして催された。記念特別公演は、12月20日に国立能楽堂で、第一部〈翁〉観世喜之・〈養老　水波ノ伝〉・〈正尊　起請文・翔入〉駒瀬直也、第二部〈羽衣　彩色ノ伝〉弘田裕一・〈百万　法楽ノ舞〉五木田三郎・〈鷺〉遠藤六郎で上演され、さらに例会とは別に数回の記念公演も催された。『能楽タイムズ』1月号に観世喜之氏と山崎有一郎氏、12月号に観世喜正氏と羽田昶氏の対談が掲載。

◎代々木果迢会十周年記念

12月21日。国立能楽堂。〈清経　恋ノ音取〉小早川修・〈巻絹　諸神楽〉浅見真州・〈望月〉浅見慈一ほか。

【源氏物語千年紀に関連する公演】

今年は、『源氏物語』の存在が文献に記されて千年という年に当たり、文学界だけでなく、さまざまな業界で『源氏物

Hosei University Repository

語』ブームともいえる盛り上がりが見られた年であった。『源氏物語』をもとにしたアニメーションの放送や、ゆかりの地をめぐる旅行ツアー、博物館や美術館の展覧会など、全国で源氏を扱った催しが数多くおこなわれた。それは能楽界においても同様で、各地で『源氏物語』を素材とした能が盛んに上演された。単に能を上演するだけではなく、源氏の朗読を伴う企画や新作能の上演といった工夫を凝らした会もあったが、〈葵上〉や〈半蔀〉といったように上演される作品にやや偏りが見られた感もある。能界のこのような源氏熱を振り返ってみると、世間の源氏ブームという現象をうまく利用して、源氏に興味はあるが能は知らなかったというような、新たな観客層を発掘し、そして定着につなげることができたか、疑問がないわけではない。源氏への新しい視点を提案するような新作能を創り、能としての可能性を秘めた廃曲を発見する絶好の機会だったかもしれない。身近な現行曲においても、源氏ゆかりの能の中にあらたな魅力を見出すことはできたのであろうか。そのような結果が得られたブームであれば、この『源氏物語』千年紀は能楽界にとって大きな意味のある出来事であったといえるだろう。以下に、源氏物語千年紀関連の主な催しをあげる。なお源氏関連の新作は次項に列記した。

国立能楽堂では、開場二十五周年記念特別企画の一環として《源氏物語千年紀》と銘うち、10月22日〈蟬〉野村萬斎・〈野宮〉豊嶋三千春ほか、10月23日〈鬼ヶ宿〉茂山千三郎・〈夢浮橋〉梅若六郎らといった企画がおこなわれた。豊田市能楽堂においても、開館十周年記念公演として4月13日、「能と朗読・語りによる源氏物語の世界〜原典と能と〜」が開催され「葵巻」の朗読解説と〈葵上〉の演能があった。また横浜能楽堂でも企画公演「源氏物語〜それぞれの恋心」と題し、演能の前に『源氏物語』の解説と謡曲の朗読を付けた公演が五回に渡って催された。さらには大槻能楽自主公演のように、年間の上演のスケジュールを『源氏物語』に統一し、3月〈源氏供養〉・4月〈夕顔〉〈玉鬘〉・5月〈融〉・12月〈夢浮橋〉と『源氏物語』に関連する能を連続して上演する企画もあった。

【復曲・新作など】

例年のごとく、新作や創作の上演、または異分野芸術とコラボレーションした公演も数多い。前述した源氏物語千年紀に関連した『源氏物語』ゆかりの新作能が多いことが注目される。主な公演のみを挙げた。

◎新作能〈麦溜〉

2月3日。国立能楽堂。神遊公演。神遊による原作・節付・型付・作調。中村健史校閲・補綴。出演は、観世喜正・森常好・一噌隆之・観世新九郎・柿原弘和・観世元伯ほか。シングルモルトウイスキーの麦溜の神〈シテ〉が登場する、スコットランドを舞台とした能。

◎新作能〈庭上梅〉

2月12日。国立能楽堂。新島襄生誕百六十五周年記念。井上

Hosei University Repository

裕久作。同志社大学の創立者新島襄を讃えた新作能。同志社創立百三十周年・同志社大学観世会創部八十周年を記念して作られた。

◎源氏物語千年紀記念新作能〈紅葉賀〉

6月1日・2日。京都平安神宮。第59回京都薪能。帆足正規・左鴻泰弘原作、茂山千之丞演出、京都能楽会制作。出演、金剛永謹・片山清司・片山伸吾・網谷正美・森田保美・曽和尚靖・河村大・前川光範ほか。光源氏と頭中将が藤壺の御前で舞を舞う。観世と金剛の異流共演。当日のそのほかの演目も、〈浮舟〉など『源氏物語』を素材にした曲であった。

◎新作狂言〈おばんと光君〉

6月2日。京都平安神宮。第59回京都薪能。茂山千之丞作・演出。出演、茂山逸平・茂山正邦・茂山千三郎ほか。

◎創作能〈仲麻呂〉

6月21日。セルリアンタワー能楽堂。セルリアンタワー能楽堂特別公演。林望台本・演出、津村禮次郎付曲・構成、森田拾史郎芸術監督。出演、津村禮次郎・安田登・遠藤博義・中谷明・坂田正博・高野彰・中国打楽器孟暁亮・声明新井弘順。遣唐使として唐に渡った安倍仲麻呂をシテとし、中国打楽器の演奏や声明を盛り込んだ創作能。

◎新作能〈兼続〉

7月31日。新潟県長岡市長岡リリックホール。長岡フェニックス能。高井松男脚本・演出、飯田清一作調、観世喜正型付・節付。出演、観世喜正・遠藤和久・高井松男・山本則重・松田弘之・飯田清一・柿原光博・小寺真佐人ほか。本年のNHK大河ドラマの主人公で、長岡ゆかりの武将直江兼続をシテとした修羅能。『観世』10月号に紹介記事、『能楽タイムズ』7月号に作者高井松男氏と中村雅之氏の対談がある。

◎新作能〈河勝〉

8月27日。大阪城西の丸庭園。大阪城薪能。梅原猛作、大槻文蔵作曲・演出。出演は梅若六郎・大槻文蔵・赤松裕一・福王和幸・茂山千之丞・茂山七五三・藤田六郎兵衛・大倉源次郎・山本哲也・三島元太郎ほか。

◎新作能〈赦〉

10月29日。フランス・パリ、国立オデオン劇場。日仏交流一五〇周年と源氏物語千年紀を記念した「GENJI～伝統芸能で綴る新作『六条御息所』」。六条御息所を題材にした、箏曲・長唄・能の三部構成の公演。出演は梅若六郎ほか。

◎復曲能〈千引〉復曲狂言〈茄子〉

11月30日。鳥取市とりぎん文化会館。鳥取池田家復曲能。〈千引〉は片山慶次郎・西野春雄監修、味方健構成・演出。出演、片山伸吾・浦田保親・味方健・村山弘・野村小三郎・竹市学・吉阪一郎・河村総一郎・上田慎也ほか。〈茄子〉は永井猛資料提供。出演、野村小三郎・松田高義・奥津健太郎。両曲ともに江戸時代、鳥取藩で上演された記録の残る作品である。

◎新作能〈花供養〉

12月26日。宝生能楽堂。白洲正子没後十年追悼能公演。多田

Hosei University Repository

富雄作、梅若六郎節付・作舞、笠井賢一演出、川瀬敏郎献花。出演、梅若六郎・宝生欣哉・真野響子・松田弘之・大倉源次郎・亀井広忠・助川治ほか。白洲正子をシテとした能。

【海外との交流・海外公演など】

◎能楽協会南米狂言公演

2月24日～3月8日。日伯交流年、ブラジル移住百周年、ウルグアイ移住百周年、日ベネズエラ外交関係樹立七十周年などを記念して、ブラジルのマナウス、ウルグアイのモンテビデオ、ベネズエラのカラカスで〈盆山・棒縛〉の公演。出演は、団長善竹十郎・善竹忠重・善竹大二郎・牟田素之。ワークショップも行われた。

◎黒川能下座フランス、パリ公演

3月12日～14日。フランス文化通信省世界文化会館の招聘による「Festival de l'imaginaire（想像の芸術祭）」に参加。

◎宝生流能楽団ブラジル公演

6月27日～7月4日。日本移民百周年記念事業としてブラジル日本文化協会の招聘。ブラジルのサンパウロ・ベロオリゾンテ・イパチンガ・サルバドール・ブラジリアで公演。〈羽衣・高砂〉と〈梟山伏・棒縛〉の上演で、出演は佐野萌・衣斐正宜・藤井雅之ほか。

◎インドネシア狂言公演

9月3日～7日。日本インドネシア国交樹立五十周年を記念した日本伝統文化振興財団の主催した公演。出演は山本則俊・山本則孝・遠藤博義ほか。〈節分・呼声〉などがウブド王宮野外舞台で上演され、インドネシア国立芸術大学デンパサール校などではワークショップもおこなわれた。

【講座・展覧会など】

◎東京文化財研究所所蔵SPレコード公開鑑賞会

3月28日。東京文化財研究所無形文化遺産部主催。高桑いづみ司会・解説。大正から昭和初期にかけて録音されたSPレコードを、最新技術によって補正、再生。十六世宝生九郎知栄の〈胡蝶〉、観世清廉の〈松風〉や松本長、初世梅若万三郎らの謡がよみがえった。

◎早稲田大学演劇博物館「現代　能・狂言面作家展」

4月1日～21日。現代を代表する能面作家二十三名の作品約百点と、舞台写真を展示する。15日には関連演劇講座が催され、講師は野村四郎・本田光洋・岩崎久人・伊藤通彦・高津紘一、司会は小林保治。

◎「国立能楽堂コレクション展～能の雅（エレガンス）、狂言の妙（エスプリ）」

国立能楽堂開場二十五周年を記念して、所蔵の能狂言面・装束・謡本・絵画資料等を展示する。本展覧会は以下の通りに全国を巡回した。国立能楽堂では常設展、企画展ともにさまざまな展示をおこなってきたが、地方での所蔵展は開館以来、はじめての試みである。現在、地方でも能楽の公演はめずらしいものではないが、展覧会の形で能楽に関わる美術品など

Hosei University Repository

を身近に鑑賞する場は限られている。このような地方への巡業展示の試みは、国立ならではの記念にふさわしい企画であるといえよう。①4月19日～5月26日。島根県立石見美術館。②7月26日～9月2日。MOA美術館。③9月3日～10月11日。国立能楽堂資料展示室。④10月25日～1月30日。奈良県立美術館。⑤平成21年1月24日～3月1日。新潟県立近代美術館・平成21年2月26日～3月29日。国立能楽堂資料展示室。

◎第七回能楽学会大会「江戸時代と能楽」

5月18日・19日。早稲田大学大隈小講堂。初日は講演「近世芸能につどう人びと―歌舞伎・浄瑠璃の興行の諸相から―」神田由築、関連発表「近世の人びとと能楽」表きよし、講演「近世金沢における芝居と能の興行について」長山直治、関連発表「江戸藩邸御成記録と能番組―三代利常治藩期を中心に―」西村聡、全体討議。二日目は研究発表。

◎武蔵野大学能楽資料センター公開講座「能と源氏物語」

①6月12日「平安朝と中世の美意識」松村武夫②7月17日「女君たちの恋の思い出」山中玲子③9月25日「歌から見た源氏物語と能」水原紫苑④10月30日「謡い舞う源氏の世界」浅見真州・羽田昶

◎第十三回法政大学能楽セミナー「時代を拓いた能や狂言の本たち」

①10月14日「もうひとつの謡本―丸岡桂の謡本改訂―」味方健②10月21日「世子六十以後申楽談儀―吉田東伍の世阿弥発見―」表章③10月22日「謡曲大観―佐成謙太郎の謡曲研究―」小林健二④10月28日「能研究と発見―野上豊一郎の独創性―」西野春雄⑤「天正狂言本―狂言研究の新展開―」田口和夫。世阿弥伝書発見から百年をふまえた講座。

◎「住友コレクション―能面・能装束・能楽楽器」国立能楽堂

10月17日～翌年1月16日。国立能楽堂開場二十五周年を記念した特別展示。十五代目住友吉左衛門友純が集めた能面百十一面、狂言面二十三面から優れた作品を、三期に分けて展覧する。

◎三井記念美術館「寿ぎと幽玄の美　国宝雪松図と能面」

12月10日～翌年1月24日。同館の所蔵する旧金剛宗家伝来能面五十四面が、重要文化財の指定をうけたことを記念した展覧会。

◎東京文化財研究所公開学術講座「音声資料からたどる能の変遷」

12月16日。国立能楽堂大講義室。東京文化財研究所無形文化遺産部主催。講演「日本の音声資料とSPレコードの五十年」飯島満、講演「明治・大正・昭和の名人たち」高桑いづみ。文化財保護委員会が作成した、幸祥光や川崎九淵らの演奏や喜多六平太らの謡を録音したSPレコードにもとづく講座。

襲名・改名など

シテ方宝生流宝生和英氏は、宗家宝生英照氏の家元職遂行

Hosei University Repository

困難により、流儀職分の賛同を得て4月1日をもって宗家を継承した。宗家披露能が10月7日、宝生能楽堂で行われた。

シテ方観世流梅若六郎氏は12月8日の公演より、芸名を10年間の予定で玄祥に改名した。

栄誉・受賞

◎重要無形文化財保持者各個認定（人間国宝）

シテ方喜多流　友枝昭世

友枝氏は、昭和15年3月24日、友枝喜久夫の長男に生まれ、父および喜多実に師事。昭和22年〈鞍馬天狗〉で初舞台、昭和25年に〈西王母〉で初シテを勤める。昭和52年、芸術選奨文部大臣新人賞、平成6年に芸術選奨文部大臣賞・観世寿夫記念法政大学能楽賞、平成14年日本芸術院賞を受賞。平成12年には紫綬褒章を受章。

◎文化功労者

狂言方和泉流　野村萬

野村氏は、昭和5年1月10日、六世野村万蔵の長男に生まれ、昭和9年〈靱猿〉で初舞台。昭和25年に万之丞、平成5年に万蔵を襲名、平成12年より萬を名乗る。昭和62年、日本芸術院賞受賞。平成6年に紫綬褒章受章、翌年には重要無形文化財保持者（各個認定）。平成13年、日本芸術院会員。

◎日本芸術院賞恩賜賞（平成19年度）　笛方一噌流　一噌仙幸

受賞理由「能の中でも最も重要な位置にある三番目物の笛に技量を発揮し、世阿弥の説く幽玄の最上の芸位を示す三老女の上演において、典麗優雅にして品格ある演奏を披露したことは誠に貴重なことであり、現在最も高く評価されている笛方の逸材である。」

◎秋の褒章（11月2日）

紫綬褒章　シテ方喜多流　塩津哲生、笛方一噌流　一噌仙幸

◎外務大臣表彰

シテ方観世流　坂井音重

◎第26回京都府文化賞特別功労賞

小鼓方幸流　曽和博朗

◎第26回京都府文化賞奨励賞

シテ方観世流　片山伸吾

◎長谷川伸賞

狂言方和泉流　野村万作

◎角川源義賞文化研究部門

『世阿弥の中世』　神戸女子大学教授　大谷節子

◎第30回観世寿夫記念法政大学能楽賞（別記彙報を参照）

シテ方観世流　浅井文義

プリンストン大学教授トーマス・ヘア

◎第19回催花賞（別記彙報を参照）

大鼓方石井流　河村総一郎

日本能楽会・能楽協会関係

◎日本能楽会

【役員構成】

《会長》野村四郎

《常務理事》観世清和・金春安明・高橋章・金剛永謹・宝生閑・柿原崇志・山本東次郎・野村万作

《理事》浅見真州・梅若吉之丞・梅若六郎・亀井保雄・豊嶋三千春・喜多六平太・粟谷能夫・高安勝久・杉市和・観世新九

Hosei University Repository

郎・山本孝・金春惣右衛門・茂山千五郎
〈監事〉高橋汎・佐野萌
【会員数】（平成21年度）総数　481名
シテ　観世203　金春17　宝生52　金剛13　喜多25　小計310
ワキ　高安4　福王6　宝生9　小計19
笛　一噌7　森田21　藤田2　小計30
小鼓　幸13　幸清8　大倉8　観世2　小計31
大鼓　葛野7　高安8　石井6　大倉8　観世1　小計30
太鼓　観世7　金春11　小計18
狂言　大蔵27　和泉16　小計43
◎能楽協会（『会員名簿』平成20年版（二〇〇八）より）
【役員構成】
〈理事長〉野村萬
〈常務理事〉武田志房・本田光洋・香川靖嗣・安福建雄・福王茂十郎
〈理事〉浅井文義・石黒孝・上田貴弘・大江又三郎・大倉源次郎・観世元伯・関根祥人・高安勝久・武田宗和・辰巳満次郎・前田晴啓・松野恭憲・山本則俊・吉野晴夫
〈幹事〉秋元実・大塚和成・中田ちず子
【会員数】　1441名
シテ　観世517　金春121　宝生253　金剛86　喜多46　小計1023
ワキ　高安13　福王21　宝生24　小計58
笛　一噌15　森田46　藤田4　小計65
小鼓　幸30　幸清10　大倉18　観世6　小計64
大鼓　葛野12　高安13　石井10　大倉11　観世1　小計47
太鼓　観世17　金春26　小計43
狂言　大蔵88　和泉53　小計141
支部別　東京662名・名古屋113名・北陸86名・京都162名・大阪189名・神戸59名・九州121名・本部扱49名

物故者

●中森晶三氏
シテ方観世流。2月8日、敗血症のため逝去。享年79。昭和3年（一九二八）3月6日生。昭和21年、二世観世喜之に師事、26年に独立。以後、31年〈道成寺〉、50年〈卒都婆小町〉、〈鸚鵡小町〉などを勤める。鎌倉能の会を主宰し、鎌倉薪能創設にも尽力。40年には、制作主演の映画『能』により文化庁芸術祭奨励賞受賞。『能のすすめ』『能の見どころ』などの著書がある。

●観世弘子氏
故観世寿夫の夫人、女優（芸名関弘子）。5月11日、肺炎のため逝去。享年78。昭和4年（一九二九）7月30日生。俳優座養成所の第一期生で、青年座に参加する。昭和45年に冥の会を観世寿夫らと立ち上げ、ギリシャ劇「オイディプース王」「アガメムノーン」「天守物語」などに出演した。56年に紀伊国屋演劇賞を近松門左衛門の語りシリーズ「大経師昔暦」で受賞。『源氏物語』を朗読したCDでも知られる。

●河村隆司氏

Hosei University Repository

シテ方観世流。5月20日、逝去。享年80。昭和3年（一九二八）1月13日、河村北星の四男として生まれる。十二世林喜右衛門に師事、4歳で初舞台。昭和29年〈道成寺〉、60年〈三輪・白式神神楽〉、62年〈卒都婆小町〉などを披く。平成17年（二〇〇五）、観世寿夫記念法政大学能楽賞受賞。河村定期研能会を主宰し、後進の育成にも尽力する。能楽資料の収集にも熱心で、収集資料は平成15年に「河村隆司文庫」として当研究所に寄贈された。

●藤田　大五郎氏

笛方一噌流。11月15日、老衰のため逝去。享年92。大正4年（一九一五）11月30日、八世藤田多賀蔵の長男として生まれる。はじめは父より稽古を受け、大正15年に十二世一噌又六郎に師事し、昭和4年（一九二九）に松本長の〈羽衣〉で初舞台。十代から多くの名人の相手を勤め、大曲秘曲を披いていく。31年、芸術祭奨励賞受賞。44年に〈松風〉で幸祥光、安福春雄とともに芸術祭優秀賞受賞。翌年には〈鷺〉で芸術祭大賞受賞。46年に重要無形文化財保持者に各個認定される（人間国宝）。51年、紫綬褒章受章。61年に日本芸術院会員に選出され、勲三等瑞宝章受章。平成17年（二〇〇五）には文化功労者となる。能楽会理事、東京芸術大学講師等を務める。囃子方の重鎮として後継者育成にも尽力した。